拝啓、融けゆく世界へ　＃６

雨宿りの村編②

鳥沼　憂

【これまでのあらすじ】

降る雨の九七％が人をも融かす酸性雨と化し、十年前の「第二次世界大天災」による被害が色濃く残る2XXX年の東京。A.C.I.D.（対天災国際防衛省）に所属する十七歳の青年・天海快晴は、天災を引き起こす怪物「天魔」を狩る「調停士」として、自身の平穏な生活を奪った天災への復讐のため、日夜天魔との戦いに身を投じていた。

七月某日、天海とその妹で雲を晴らす力を持つ「天ノ巫女」である照、そして二人のお目付け役として呼ばれた新人調停士兼整備士の日暮凪沙は、「雨宿りの村」と呼ばれる隠れ里へ遠征に来ていた。新たな傘を作ってもらうため傘職人・霧矢の元を訪れた天海だったが、霧矢に実力を認めさせ傘を作ってもらうには、彼の娘であり京都支部屈指の実力者である霧花に、一日後の模擬戦で勝つ必要があると告げられる。

一方、村に伝わる「天ノ巫女」の伝承を知るため、巫女と縁のある天照大御神を祀る神社へと招かれた照。案内役の少女・シキと共に社の奥へと進むが、その道中で突如、シキの姿が桃色の長い髪をした異彩なオーラを放つ女性へと変貌し――

☆過去作バックナンバーはこちら☆

＃１・２（プロローグ）　……Ｒ４年度新入生歓迎号
＃３（梅雨晴の戦い・前編）　……Ｒ４年度創苑１号
＃４（梅雨晴の戦い・後編）　……Ｒ４年度創苑３号
＃５（雨宿りの村編①）　……Ｒ５年度創苑１号

【主な登場人物】

天海快晴……天災を起こす怪物、天魔を討伐する組織《A.C.I.D.》の戦闘員『調停士』である十七歳の青年。妹の照を溺愛している。十年前の《第二次世界大天災》により左目の視力を失っており、眼帯を付けている。

天海照……快晴の妹。黒髪のサイドテールで、常にレインコート等の雨具に身を包んでいる。《第二次世界大天災》で被災した後遺症が遺っており、基本的に《A.C.I.D.》東京支部の医務室にて保護管理下に置かれている。「天ノ巫女」と呼ばれる、雲を晴らすことができる能力を持つ。

神宮寺陸斗……天海快晴ら調停士の戦闘等をサポート・バックアップする調停士補佐官。ブロンドの髪を後ろで束ね、青縁の眼鏡をかけている。東京支部全体の副隊長

でもある。天海兄妹とは古くからの付き合い。
日暮凪沙……東京支部の新人調停士兼メカニック。ピンクの髪をツインテールにした小柄な少女。機械いじりとかわいいものが好き。快晴に密かに（？）恋心を抱いている。
京極霧花……京都支部の調停士。外部の人間には存在が秘匿されている「雨宿りの村」の案内役を務める。村の傘職人・霧矢の娘。何やら東京支部の神宮寺と過去に関わりがあったようだが……

＊　＊　＊

「……シキ、さん……？」
「天ノ巫女」の伝承について知るため、天照大御神を祀る社、日向神社のその地下に隠された遺跡へと連れられた照。しかし突如として案内人のシキが姿を消し、代わりに長い桃色の髪を靡かせた背の高い女が現れたのだった。
「……なんか、あんまり驚いてなくない？　リアクション薄い系の子なの？」
「え、ええと」不満げな物言いの女に、照は戸惑いつつ返答する。
「私、ほとんど目が見えなくて……歩くのはTell-Telに誘導してもらってるから大丈夫なんですけど、今もなんとなくシキさんの姿が変わってるのは分かるんですが、本当にそのくらいしか分からなくて……」
そう言って、照は自身の周りを浮遊する、白いてるてる坊主形の機械を掌で指す。A.C.I.D.から調停士に支給されている自立型AI搭載の通信デバイスで、主に天魔狩りのための機能が備わっているのだが、照のそれには特別に、盲導犬のように行き先の安全を確かめ、歩行をサポートする機能が搭載されていた。
「あら、そうだったの？　大したものね、全然気がつかなかったわ」
褒められているのかは微妙だったが、照は「小さいときからこれなんで、慣れてるんです」とはにかむ。
「でも、それじゃあ話しづらいわね……仕方ない」
そう言うと、女は先ほど謎の怪異を追い払ったときと同じように、人差し指と中指をくっつけた右手で、照の額に触れる。
「ちょっと刺激が強いかもしれないから、驚かないでね」
女がそう囁いた次の瞬間――照の脳裏に、一筋の閃光が走った。
「――っ！？」
一瞬、脳が焼き切れるような熱が通り過ぎたように感じたが、それは生まれて初めての――いや、十年ぶりの

感覚に、細胞が反応し切れなかったせいかもしれない。そう、照は十年ぶりに、視界を手にしていたのである。
「……う、そ……これ……」
感動なのか畏れなのか、照本人にも分からない感情が溢れ出し、全身がガクガクと震える。だが、彼女の頭がいくら揺れても、視界はブレずに遺跡の壁だけを映していた。
「正確には視力を戻したわけじゃなくて、貴女の脳に直接、私のイメージを投影しているだけ。ま、そのほうが便利だし、むしろ視力よりいいかもね」
女はさらっと言ってのけるが、照は未だ思考が追いつかず、得体の知れなさと畏怖だけが募っていく。
「……あなたは、何者なんですか」
意を決して照が尋ねると、女は「よくぞ聞いてくれた」とでも言いたげに、ニヤリと口角を持ち上げて言った。
「私はアマテラス。貴女達が言うところの――太陽神、ってやつね」
「アマテラス……って、霧花さんが言ってた、天照大御神のこと……ですか？」
「大御神、ね……今はそう呼ぶ人も、少なくなったけれど。第一、そんな力があるかどうかも怪しいし」
シキ、もといアマテラスはそう弱気に呟く。眼の前に「伝承」として謳われていた神が顕現している、というのもにわかには信じがたい話だが、人の脳に直接イメージを送るという奇跡のような力を見せられては、彼女が神だというのも納得するしかなかった。
「……でも、どうしてその、アマテラス様が直々に、私なんかのところへ……」
照は単純な疑問からそう尋ねたのだが、アマテラスは溜息混じりに「貴女ねえ」と吐く。
「私なんか、って、私は貴女のために下界へ顕現してきたのよ、『天ノ巫女』。立場を自覚しなさい」
思いがけず説教を受け、反射的に「す、すみません」と謝ってしまう照。しかし直後、自身のそもそもの目的を思い出し、おずおずと告げる。
「……あの、実は私、『天ノ巫女』のこと、ほとんど何も知らなくて……だから、教えていただきたいんです。私のこの力はどういうもので、何のためにあるのか」
真剣な眼差しで神に訴える少女を見て、アマテラスは小さく頷く。
「言われなくても、元々そのつもりでいたわ。どうせ、変に平和ボケしたこの国じゃあ、ロクな伝承者もいなかったんでしょうし」
「良かった……ありがとうございます」
ようやく少し緊張も解けたようで、口元を綻ばせる照。
「それじゃあ、まずは『天ノ巫女』が、そもそも何なのか……ってところからね」

アマテラスがぎゅっと目を瞑り、一秒ほどして開けると、照の視界が瞬時に移り変わった。
「……これは」
「遺跡の壁画。文字も紙もなかった太古の時代において、唯一時を越えて遺る記録」
石壁に引っかき傷のように遺された絵は、その意味の全ては理解できずとも、確かに照に向けて過去を伝えようとしていた。

黒い雲から降る雨。雨。
激しい雨。
終わりの見えない雨。
作物は枯れ、河川は荒れ狂う。
人は飢え、溺れ、
疫病が蔓延し、
大勢が死ぬ。
人々は救いを。
太陽を、求める。
絶望に打ちひしがれる人々の中。
一人の女が、前に出る。
女が祈りをくべ、
跪く。
すると。
雲は裂け、光が――

太陽が、現れる。
人々は彼女を崇め、讃え、祀り上げた――。

「これが記録に残る、最古の『天ノ巫女』の伝承。神に祈りを捧げ、晴れを乞う……そんな力を持った人間が、歴史の中に極稀に存在した。そう、考えられているわ」
アマテラスは意味深に語り終えると、一旦話を区切り「ところで」と、照に問いかける。
「貴女は、『神』とはどういうものだと思ってる？」
「……え」
神、とは。考えてもみなかった問いに、照は言葉を詰まらせる。そもそもつい数分前まで、実在するものだとも思っていなかったのだから。
「……世界を管理する、人知を超えたもの、という感じでしょうか」
「まあ、一般人の模範解答といったところね。つまらないわ」
「す、すみません」
バッサリ切り捨てられ、またも謝罪が口を突いて出てしまう照。アマテラスはそんな彼女に呆れた顔をしながら言った。
「神は、人間と地続きのものなの」
「……地続き？」
意味を理解できず繰り返す照に、「そう」と頷くアマ

テラス。
「神が人を造ったのではなく、過ぎた人が神になった。正確には、神に成れる才を与えられた人間が、神と成るという話だけれど」
「……なるほど……？」
未だ首を傾げたままの照を見て、アマテラスは「仕方ないわね」と腰に手を当てる。
「単刀直入に言えば。天海照、貴女は神になる素質を持つ人間なの。私の後を継ぐ、次期天照大御神にね」
「……はい？」
照はあからさまに当惑した様子で、何度も瞬きを繰り返す。
「な、何かの間違いじゃないですか、私が神様になるなんて、そんな――」
慌てて首と手をぶんぶんと振って否定する照だが、アマテラスは冗談を言っている様子もなく、至って真剣に彼女の目を見つめていた。
「『天ノ巫女』は、そういう存在なの。数百年に一度、太陽神の代替わりを行うために生まれる人間。現に私も、元は人間だった」
「……本当に、私なんですか？　生まれも育ちも、なにも特別なところなんてないのに……」
「ええ。貴女じゃなければならなかった理由もないし、たまたま貴女が選ばれた、それだけのこと」
アマテラスは無慈悲にそう告げると、さらに続けざまに切り出す。
「過去に二度起きた大天災……あれも、全ては貴女を、『天ノ巫女』を目覚めさせるためのものよ」
「……！！」
大天災。その意味するところを理解するのにコンマ数秒もかからなかったし、何よりそれは彼女の心奥にも深く消えない傷を遺していた。
「……どういうこと、ですか」
照はこれまで誰にも見せたことのないような、獣のような目つきで眼前の神を睨みつける。
「それを説明するには、まず天災とは、天魔（てんま）とは何か、というところから始めないといけないわね」
凄む照に首をすくめて、アマテラスは語り出した。
「天魔とは、世界の環境悪化に伴って生じだした、世界の歪（ひず）みから生まれた存在。ある程度は私達で制御ができるけれど、それでも抑えつけられないものが、地上へ流れ出る。それを狩る人間を、私たち神と魔との間に介入する人々という意味で、『調停士（ちょうていし）』と呼んだのだけど……今となっては、語源を正しく知っている人間なんて殆ど居ないんじゃないかしら。
話を戻すと、これまでなら天魔の発生数なんて高が知れてるもので、人知れず調停士が退治しておしまい、だったんだけれど。世界環境が悪化していくにつれて、天

魔の発生も頻発するようになって……それを押し止めるのにも労力が必要になって、加えて私の力自体も年々衰えていった。神の力は当然、人間よりも強大だけれど、それでも限りはあるの」

現に、昔なら日本のどこであっても顕現することができたものの、今は晴域の中――「雨宿りの村」の中か、調停士の作り出した雨を防ぐ結界の中にしか、神として姿を現すことはできないのだと、アマテラスは寂しそうに告げた。

「本来なら神の力が衰え出したタイミングで、次の『天ノ巫女』が現れるから、そこまで長い期間神力（じんりき）不足に陥ることはなかった。でも……今回はそのスパンが極端に短かった。歴史を鑑みれば、次の巫女が現れるまで、まだ百年以上はかかる。悠長にそれを待っていたら――この国は天魔で溢れ、人も、街も、全てが融けて、海に消えてしまう」

「……っ」

照の脳裏に、十年前の朧げな風景がフラッシュバックする。どろどろに崩壊したビル群、枝葉を奪われ剥き出しになった木々、家屋や――人の皮膚すらもゆっくりと蝕んでいく、全てを融かす酸の雨。それが一週間も、一ヶ月も、一年間も降り続ければ……間違いなく、この国は滅びる。その程度は、照にも安易に想像がついた。

「どうすれば、今すぐに巫女を誕生させることができるか……そう考えていた折、異国の太陽神から報告があった。ほら、気候変動はこの国だけじゃなく、全世界的な問題でしょう。うちだけじゃなくて、各国が同じような事態に苦しんでいた。その国の太陽神は私よりも衰弱が酷くて、天候管理も崩壊寸前だったんだけど――大規模な天魔の流出が切欠となって、未だ生まれるはずのなかった『天ノ巫女』が、覚醒した」

「……！」

「要は、人体の免疫システムみたいなものなのよ」アマテラスは自らの体を指でなぞって言う。「天魔は病気のウイルス。神は抗体。今の抗体が弱まっているなら、一度過激なウイルスを投与して、体……世界を刺激してあげれば、新たな抗体――巫女が生まれる。あとは巫女が成長すれば、ウイルスは退治されて、世界に平穏が戻る」

「……じゃあ、そのために、私は」

「さっきも言ったように、これは全世界的な問題だから、それなら世界的にタイミングを合わせたほうがいいんじゃないか、ってことで、太陽神達は意図的に天魔を押し止めておいて……一斉に放出した。結果は、うまくいった所もあれば、そうでない所もあったけれど。それでも、第一回と第二回を合わせて、約八割の地域では巫女が誕生した。確率でいけば、次の第三回でほぼ全ての地域において――」

「――ふざけないでください！！」

突如として照は声を荒らげると、首を大きく横に振って、アマテラスと繋がっていた感覚を自ら遮断する。
「そのために……そのために、お父さんもお母さんも、殺したっていうんですか！？　お兄ちゃんのことも、傷付けて、酷い思いさせて……！！」
「全ては、人類の――世界の存続のため」
涙を浮かべ、声を裏返して叫ぶ照に、神はただ冷酷に返す。
「大天災が起きず、貴女が巫女に覚醒しなければ、この国はそう遠くないうちに滅亡していた。どちらが良い結末かは、言わなくても分かるでしょう」
「……っ」
とっさに返す言葉が出てこず、照は歯噛みする。
確かに、これは最悪な結末ではない。それは彼女にも理解できたし、神の言い分にも一理はあると感じた。だが、人間の立場からすれば、そうやすやすと受け入れられる話でもなかった。
「ともかく。貴女の使命は、『天ノ巫女』としての力を覚醒させ、私の後を継ぐ天照神になること。それは理解できた？」
「……はい」
小さく低い声で、照は首肯した。
「宜しい。で、ここからが大事なんだけど……貴女の巫女の力は、まだ完全ではない。ありていに言えば、神になるには力不足」
照はこれにも小さく頷く。強く念じることで、雲を晴らし太陽を呼び寄せる……「天ノ巫女」の能力とされる力は使えるものの、使用時に起こる力の反動は大きく、使いこなせているとは到底言えなかった。
「もうじき実行される、第三次計画時にはおそらく、完全に目覚めさせられるでしょうけど――」
「――自力でどうにかする方法は、ないんでしょうか」
アマテラスの言葉を遮り、照は確かな意志を持った声で言う。
「……確かに神様の言う通り、世界を滅亡の危機から救うには、それしか方法が無かったのかもしれない。そのために犠牲が出るのも、仕方が無いのかもしれない。でも……でも、失くならなくてもいい命があるなら、私は……せめて一人でも多くの命を、失くならなくてもいいようにしたい」
照の視界は既に朧げであるにもかかわらず、その目はまっすぐにアマテラスを見つめていた。
「……神の力の源は、信ずる力」
アマテラスはそんな照に応えるように、呪（まじな）いのごとく口に出した。
「馬鹿みたいだけど、奇跡って信じることでしか起きないのよね。世界が、人々が、神の……貴女のことを信じていなければ、貴女が何を施したって無駄」

アマテラスの声は何か思うところがあるように憂いを含んでいたが、照は言葉の意味を未だ測りかねて下を向く。
「まあ、まずは貴女自身と、貴女に一番近い人間が、貴女を信じてあげるところからじゃないかしらね」
「私と……私に、一番近い人……？」
その人物は考えるまでもなく、すぐに思い浮かぶ。だが、彼が照のことを信じていない、というのは、彼女にとっては受け容れ難いことだった。
「ああ、そうそう。今日の話は、他の人間には明かさないように」
「えっ……霧花さんや、お兄ちゃんにもですか？」
「そいつは特に駄目」
アマテラスは眉間に皺を寄せて念押しする。
「考えてもみなさい。天災が貴女の覚醒のために仕組まれたものだった、なんて知ったら、あの貴女のことしか頭にないようなバカ調停士は、何をしでかすか分からないでしょう。そもそも、貴女が神に成るということは、下界を離れて天上界に上ることが、決まっているということなのよ」
「……あ」
彼女に言われてようやく、照はハッとした。神に成ることは、すなわち天海や凪沙、神宮寺……下界の人々との、おそらく永遠の別れを意味しているのだ。そんなことを話せば、兄がどれだけ取り乱すか、嫌というほど容易に想像がついた。
「でも、それじゃ今回のことは、霧花さんたちに何て説明すれば……」
「人間らが伝えている伝承と同じことを、伝えてやればいいわ。巫女は天照大御神の血を引く者で、過去に大きな天災が起きたときも、巫女の力で防がれてきた。今回も同じように、巫女の力さえ万全になれば、天災は抑え込むことができる……こんなところかしら」
アマテラスの説明は、決して間違ってはいない。霧花の語っていた伝承とも大部分が重なるし、納得もしてくれるだろう。だが、アマテラスから告げられた真実と比べれば、それは表面をなぞっただけの薄っぺらいものにしか思えなかった。
「……なんだか、嘘をつくみたいで、忍びないです」
「貴女だって、いたずらに兄や友人を傷付けたくないでしょう。彼らがわめいたところで、今更変えられるものでもないのだから」
自分が居なくなることが分かれば、天海はきっと誰よりも悲しむだろう。そんな兄の姿を見たくないのは、照だって同じだった。しかし――
「……じゃあ、いつ伝えればいいの……？」
照は自分にすら聞こえたか怪しい、か細い声で呟いた。目の前の神がその答えを持ち合わせていないことは明ら

かだったからだ。
「……っと、そろそろ時間ね。それじゃ……シキには、『天照（あまてらす）が体を借りた』と、伝えておいて」
「あ……っ」
　最後に何か言わなければ、と考えている間に、彼女を中心とした旋風が巻き起こる。照が再び目を開けた時には、既にその姿は元のシキへと戻っていた。
「……あ、れ……巫女様？　私、一体何を……」
「……シキさん。話は全て、天照様からお聞きしました」
　照の言葉に、シキは一瞬目を丸くしたが、すぐに安堵の表情を浮かべる。
「天照様が……それなら良かった。私から説明するより、その方が確実でしょうし」
「……はい。でも……正直、まだ全部は、飲み込めてなくて……」
　不安げに俯く照の肩に、シキが優しく手を置いた。
「大丈夫です。天照様は、またきっと巫女様の前に現れてくださいます」
「……そうだと、いいんですけど」
　またきっと。その「また」が、いつになるのか。――兄たちと離れ離れになる前に、間に合うのか。二人の会話など何も知らないのであろうシキの穏やかな笑顔の前に、恨めしい思いさえ抱く照であった。

＊　＊　＊

　気が付くと、天海はひどく懐かしい景色の中にいた。
　淡い水色のカーテン、木目のダイニングテーブル、ぼんやりとした明かり、空っぽのソファ。家具を触るだけで日だまりのような匂いすら覚えるほど、その温かな風景は彼の記憶の奥底に染み付いていた。
「おかえり、おにいちゃん」
　舌足らずな甘い声に振り返ると、そこには天海の膝下ほどの背丈しかない幼女が立っていた。好奇心に輝いた大きな瞳、肩まで伸びた黒髪、肩紐だけの簡素なワンピース。記憶に新しいその姿とはまるで別人だが、天海が彼女のことを見間違えるはずがなかった。
「――照」
　その名前を呼ばれると、少女は嬉しそうに歯を見せて笑う。
「どこに行ってたの？　おにいちゃんがあんまりおそいから、おとうさんもおかあさんも、先にいっちゃったよ」
　そう行って、幼い照は机の上を指差す。見ると、そこには丁寧な字で書き置きが残されていた。
『快晴へ　お母さんたちは先にまってます　照のこと、

よろしくね』
「……母、さん？」
　先に行く。待っている。
照や母の言っている意味が分からず、天海は言葉に詰まる。照のことをよろしく、というのも――
「ねえ、おにいちゃん」
　照のきらきらと光を取り入れた瞳が、天海を見上げる。
「おにいちゃんは、どうしておかあさんたちを、置いていったの？」
「……置いて……いった……？」
　遠慮を知らない、まだ幼い少女の声は、耳によく通る。
それ以外の音が、世界から消えてしまうかのように。
「そうだよ。おにいちゃんが置いていったから、おかあさんも、おとうさんも」
　――死んだんだよ。
　無邪気な声が、天海の耳をつんざくように突き刺さる。
その瞬間、彼の記憶を閉じ込めていた蓋が外れ、霞がかっていた過去が鮮明になる。
「――違う、違うんだ、照！　俺は――」
「違わないよ」
　何言ってるの、とばかりに、照の声には嘲るような笑いが孕んでいた。
「おにいちゃんのせいで、おかあさんたちは」
「――ッ、それは、照、お前を守るためで……」
「じゃあ、どうして」
　照の表情に、初めて陰りが見える。
否、表情というよりは、瞳だけがゆっくりと、翳っていくのが見えた。
「どうしてお兄ちゃんは、私を助けてくれなかったの」

＊　＊　＊

「――照！！」
　布団を跳ね除け、叫び声と共に天海は上半身を起こした。
　掌にはじっとりと汗が滲み、心臓が痛むほど脈が速くなっている。上がった息を落ち着かせてから周囲を見渡すと、隣の布団では照が、気持ちよさそうに寝息を立てていた。久し振りの外出で疲労もあったのだろう、幸い起こしてしまったわけでは無さそうだった。
「……天海さん？」
　目を擦りながら体を起こしたのは、少し離れたところで眠りについていた霧花だった。隣の凪沙を起こさないよう小声で、天海の様子を伺う。
「……悪い、起こしてしまったか」
「いいえ、気にせんとってください」霧花は優しく首を

横に振る。
「……眠れへんどすか？」
「……少し、な。昔の夢を見て、目が冴えてしまった」
「昔の夢、どすか」
　しばしの沈黙が続いた後、霧花の方から「天海さん」と声が掛かる。
「少し、昼間の続きでもいかがどすか」
「……いいのか？　こんな夜中に」
「どうせ眠れんのなら、有意義に使ったほうがええやろ。その代わりっちゅうわけでも、ないんやけど」
　霧花は悪戯っぽく目を細め、そうっと立ち上がる。
「聞かしてくれへんどすか、天海さんの昔の話」

「……俺と照は、東京のごく普通の家庭で暮らしていた。前に言ったように、特別な家柄というわけでも、親が特殊だったわけでも、なんでもない……と、思う。もしかしたら、俺たちの知らない秘密が何か、あったのかもしれないが」
　天海と霧花は、鍛錬用の傘を担いで中庭へと出た。傘といっても、負荷をかけるために鉄で作られた十キログラムはあるもので、雨具としての実用性は皆無だった。昼間はただひたすらこれを素振りする、という特訓というにも前時代的な特訓により、夕方ごろには一時期腕が持ち上がらないほど筋肉が悲鳴を上げていた。とはいえ、数時間ほど睡眠をとったおかげか、再び素振りに戻れるほど体力は回復しつつあった。
　満月にほど近い月が浮かぶ、澄んだ暗闇の下。素振りに興じる天海を見守りながら、霧花は彼の語りに耳を傾ける。
「十年前の、第二次世界大天災（セカンド・テンペスト）の日。俺たちの住む地域も避難区域に入り、俺と照も母に連れられて家を出た。父は国家公務員で、その日も緊急出動が出たとかで、家にはいなかった。
　最初の避難所へは、無事に着くことができた。幸い道中の雨も大したことはなく、一晩いれば収まるだろう……そう、殆どの人が楽観視していた。事態がおかしくなったのは、その日の夜中のことだった」
　天海の傘を握る力が、ぐっと強まる。
「……近所でもかなり大きな川が決壊したと、放送があった。避難所からさほど近いわけでもなかったが、相当な深さがあったから決壊はしないだろうと思われていたし、決壊すれば……水はここまで迫ってくるだろう、と言われた」
　雨害の恐ろしさは、決して酸の雨だけではない。豪雨そのものが引き起こす土砂災害や河川の氾濫……天災による被害の数は、むしろそれらの方が上だったという機関の調査結果もあった。

「当然、俺たちは別の避難所へ逃げるよう促された。だが――避難所には、すぐに逃げることの敵わない老人や、妊婦といった人達もいた。母は、そんな人達を見捨てるような真似が、できない人だった。すぐに避難を開始する一団に俺たちを任せ、自分はここに残って後から向かう、と……照のことを守ってやって、と、俺に言って……っ」

天海の握った手が、わずかに震え出す。歯を食いしばった顔を見て、霧花は胸が締めつけられるように感じた。

神宮寺から聞いてはいたが、彼はまだ未成年なのだ。親のいない生活には慣れることはできても、その時の感情を割り切ることは、きっとまだ難しいのだろう。

普通なら何よりも自分の子どもたちを優先させそうなものだが、目に映るすべての人々を救おうとする度の過ぎたお人好しは、霧花もいくらか見たことがあったため、気持ちは分からなくもなかった。そしておそらく、その並外れた正義感は、天海や照にも少なからず受け継がれているのだろうとも想像がつく。行為の正当性はさておいて、霧花には彼女を責めることはできなかった。

「……それで、俺と照は他の大人達に混じって、別の避難所への移動を始めた。俺はともかく、照はまだ三歳くらいだったから、母がいないのをひどく嫌がってな。家に帰りたい、母と離れたくないと駄々をこねるあいつの手を無理やり引っ張って、泣き疲れたところをおぶってやって……本当、大変だった」

その言葉とは裏腹に、天海の頬は心なしか緩んでいたように見えた。霧花の見ていた限り、照はまだ十四歳とは思えないほど聞き分けのよい、大人びた子に見えた。災禍に巻き込まれたことが彼女の性格に影響したのかは定かではないが、兄にとってはかつて苦労をかけられた思い出すら、大切な記憶になっているのだろう。

「最初のうちは、周りの大人たちも気を遣ってくれて、水や食べ物を分けてくれたり、色々手助けしてもらった。……余裕のあるうちは、誰だってそういう振舞いができるんだ」

天海は意味深に呟くと、ブォン、と風切音を静寂に響かせ、乱暴に傘を振る。

「……目指していた避難所は、酸の雨が集中して降ったのか、天井が融けて壊滅的な状態になっていた。中も、数人の動かなくなった、融けた人体を除いては、もぬけの殻だった。当然物資も目ぼしいものはないし、あったとして融けて使い物にならなかっただろう。一晩歩きっぱなしだった俺たちは、仕方なく瓦礫の上で軽い休息をとり、次の避難所へと向かうことになった。休息といっても雨風はほぼ凌げないし、雨の中夜道を歩き続けて、体力も相当消耗していた。照はなんとか宥めて寝かせたが、俺は不安と疲労とで、とてもじゃないが寝つけなかった。

当然、他の大人たちもそうだったわけで、皆自分のことで手一杯だった。運悪く眠っていた間に、融けた天井の破片が降ってきて負傷した奴もいたが――哀れんだ視線は向けるくせに、誰も助けてやらなかった。……それは俺だって同じだったが。

そんなだったから、次第に統率も取れなくなっていって……気が付いたら、俺たち二人は集団からはぐれていた。ガキ二人の足じゃ、大人たちに気を遣わせなければ、すぐに置いていかれるのは自明だった。焦ったし、気が遠くなった。行く先も分からなければ、途方もない道を歩く気力もない。それにもし、避難所を見つけたところで……先の場所のように廃墟と化していたら、と思うと、微かな希望すら持てなかった」

「……」

霧花は、天海たちを見捨てた「大人たち」とやらに対して、無性に嫌悪と苛立ちを感じていた。子どもと大人では見える景色の受け取り方も、能力にも大きな差がある。まして、幼い彼はさらに小さな妹を、懸命に庇護しながら生きてきたのだ。自分たちの命が大事なのは当然だが、彼らの姿を見て恥ずかしいとは思わなかったのだろうか、と考えてしまう。

「もう歩けない、と照がぐずるもんだから、少し休憩しようと付近の家だった場所の軒下に座り込んだ。それが良くなかったんだ――気付かないうちに俺は眠ってしまっていて、その隙に照は……一人でいるところを、あいつに……ッ」

そこで明らかに天海の様子がおかしくなったのが、霧花にも感じ取れた。呼吸が荒くなり、傘を振る手も大きくブレ出す。

「集中できん状態で傘を振っても、意味ありまへんどすえ。言い出した手前で悪いんやけど、一旦修行は休みましょか」

「……っ、そうだな……済まない」

霧花の提案で、中庭から少し離れた池の畔に、二人は座り込んだ。荒んだ呼吸も次第に落ち着き、いくらか平常心を取り戻した天海は、語りを再開する。

「……今まで聞いたこともない、鮮烈な金切り声で目が覚めたんだ。気が付いたら――見るもおぞましい鈍色の怪物と、顔を押さえてうずくまっている照の姿が、目に飛び込んできた。俺はすぐに照に駆け寄ったが……顔はひどく焼け爛れていて、見るのも耐え難かった。呼吸すら浅く小さくなっていく照が、俺の目を見て訴えるんだ。痛い。苦しい。助けて――。

……未だにあの照の顔が、俺の頭に焼き付いて離れないんだ。兄として妹を守れと言われたのに、妹が助けてくれと言ったのに。俺は――助けられなかった。照に、一生残る傷と苦しみを与えてしまった。だからなのか、時折……あの時の記憶がフラッシュバックして、体が言

う事を聞かなくなることがある」
「……天海さん」
彼のその「癖」については、霧花もうっすらと耳にしていた。相手が妹でなくても、記憶の中の彼女を無意識のうちに重ね、自分の身も顧みずに救おうとしてしまう――「救う」と言うと聞こえはいいが、周りも見ずに突っ走るというのは、戦場に出る兵士としては余りに危険で、命知らずな行為だ。
その時はまだ調停士はおろか、天魔の存在すらも知らなかったはずの天海に、何ができたはずもない。むしろ、下手に立ち向かったりなどすれば、天海自身が殺されていた可能性も大いにある。
だが、そんな理屈をこねたところで、彼は今更救われも納得もしないだろう。彼もその程度のことは理解しているはずだからだ。
それを抜きにしても、自分自身が許せない。彼も照も両親譲りで、そしておそらく師匠にも似て――生真面目なのだ。
しかし、と霧花は顎に指をかける。おそらく、彼がここまで調停士として生きてこられたのは、この「呪い」のおかげでもあるのだろう。そうやって残酷な運命から正気を守ってきた人間の存在を、彼女は少なくとも一人は知っていた。
「……話が逸れたな。といっても、その後は記憶が曖昧なんだ。顔を上げたら奴の腕が迫っていて――これは、その時の傷だ」
そう、天海は左目の眼帯を指して言った。照のときと比べ随分と淡白な言いようだが、片目が見えなくなる傷というのも決して小さくはないはずだ。
「あまりの痛みで頭が熱くなって、意識も朦朧としてきた。このまま死ぬんだなと、どこか冷静になっていた自分もいた。だが、実際にはそうはならなかったわけだ……次の瞬間、眼前の怪物は呻き苦しみだして、茶色く干からびていった。何が起こったのか、理解が追い付かなったが……あれが恐らく、照の『天ノ巫女』としての力だと分かったのは、それから暫くしてのことだった。結局、俺は照を守るどころか、守られてしまったわけだ」
天海は自虐的に笑い、視線を落とす。彼が照を守ることに執着するのには、彼自身のプライドという側面もあるのかもしれないと霧花は感じた。
「助かりはしたものの、いや、目に見えた危機が去ったことで気が抜けたのか――俺の意識も次第に遠くなっていった。掠れていく景色の中、最後に見たのが、こちらへ駆けてくるレインコートの金髪の男の姿だった」
「……それって」
「神宮寺だ。……あいつが見つけてくれなかったら、きっと俺たちは雨の中で、野垂れ死んでいただろうな」
天海の言葉に、霧花は優しく顔を綻ばせた。

「……そうどすか。陸斗さんも、そっちで頑張っとったんやね」
「……ずっと気になってはいたんだが、霧花と神宮寺はどういう関係なんだ。神宮寺は、一度だけ会ったことがあると言っていたが」
「別に、大したものやないどすえ。一度だけ、っちゅうのも間違いやない。ま、多少の因縁はありましたけど」
「因縁？」と聞き返した天海に、霧花は可笑しそうに目を細めて微笑む。
「『西の京極（きょうごく）、東の神宮寺』」
どこかで聞いたような響きに記憶を辿り、天海は今朝の二人の対話を思い返した。別れ際、彼らが互いに当てつけのように言い合っていた言葉だ。
「ウチも陸斗さんも現役で前線に出ていた頃は、そう呼ばれとったこともあった。別にウチらが言い出したわけやなく、誰かが勝手にそう言いよっただけなんやけど」
「……ああ」
納得した様子で、霧花とは違う意味合いで目を細める天海。なんとなくだが、自分たちが軽い気持ちで呼んだら怒られそうな気配がした。
「というか、霧花は今は現役じゃないのか」
「そらぁ、二十年近くも居ったらね。いつまでも前線におったら、若い世代が育たんし。十年前の大災害とか、猫の手も借りたいようなときは別やけど」
天海は少なからず驚いた。彼にあれほどまでの圧倒的な差を見せつけた霧花が、既に前線を引いた身だとは。悔しさはさることながら、その強さを手にするまでの道のりが途方もないもののように感じ、彼はぐっと傘の柄を握りしめる。
「で、陸斗さんに助けられた天海さん達は、東京支部で保護されるようになった……っちゅうわけどすな」
唐突に話を戻した霧花に、天海は慌てて我に返り頷く。
「ああ。いくら災害孤児といえど、組織として保護をするというのは特例らしいんだが――あんな大災害の中、いちいちそんなことをしていたらキリがないからな――、照が『天ノ巫女』かもしれない、と俺や神宮寺の証言から判明したことで、調停士として所属することを条件に、組織の保護下に置かれることとなった」
「……調停士になることを条件に、どすか」
天海の説明に引っかかりを覚えたのか、霧花は僅かに唇を尖らせる。保護下に置く、という選択自体は、身寄りのない彼らの命を救う英断だったのかもしれない。しかし、まだ自主的な決定権を持たない年齢の彼らに、実質的に戦場に出ることを強いるというのは、霧花にはあくどいやり口のように思えた。天海の目的と調停士の使命は、うまく合致していたのかもしれないが。
「調停士や天魔のことも、戦いのやり方も、ほとんどは神宮寺から教わった。霧花の言う通り、確かに俺にとっ

ては師匠とも言えるんだろうが……俺たちにとっては、どちらかというと、親のようなものだったな」
その言葉に、霧花はハッと虚を突かれたような心地になる。考えてみれば当然のことだったが、幼い彼らに真っ先に必要だったのは師ではなく、自分たちを愛し守ってくれる親の存在だったのだ。
「そうどすか……陸斗さんが、親に……」
霧花は嬉しいような寂しいような、複雑な表情を浮かべ、自ら呟いた言葉を噛みしめる。「別に、本当の子供じゃないんだぞ」と茶化すように天海は笑う。
「いえ、なんか納得がいきましたわ。そんなんやったら、あんさんから陸斗さんの面影を感じるのも、当然やなあと思うて」
「……そうか？」
いまいちピンときていないように前髪をいじる天海に、霧花はクスリと笑う。
「ああ、そういう察しの悪いところとか……うそうそ、冗談どす。そんな怖い顔せんといてな……ふふ。少しは、楽になりましたか」
「……そう、かもな」
思えば、誰かにこうして過去の話を打ち明けたのも久し振りだった。話すことで何が変わるというわけでもないが、天海はほんの僅かに、気分が晴れたような心地になっていた。
「さて、それじゃ戻りましょか。さすがに夜通しじゃあ、体に支障が出ますえ」
「……そうだな」天海は少しだけ残念そうに了承すると、傘を縁側へ立てかけた。
「……ありがとうな、霧花」
夜風にかき消されそうな呟きを拾い、霧花は何も答えず小さく微笑んだ。

＊　＊　＊

翌日も、調停士ふたりの朝は早かった。日の出と共に起床し、朝食を摂るより先に傘を振り、照や凪沙が起きてくる頃には既に汗だくになって帰ってきた。事前に霧花がセットしておいた自動炊事のおかげで、食器によそうだけで立派な朝食が食卓に並ぶ。
村の外ではまず味わえない天然の太陽で育てられた野菜の漬物に、新鮮な川魚を焼いた香ばしい匂いと、釜で炊いたつやつやの白米が食欲をそそる。デザートにはカットしたフルーツが用意され、まさに村の豊かな食文化を象徴するかのような食事――ではあったのだが、天海はそれらを味わう間もなく緑茶で流し込むと、食休みもそこそこに外へ出ていってしまった。

「……なんか怖いくらいの気迫だったわね」
「それだけ気合いが入っとるっちゅうことやろね」
　凪沙の言葉に答える霧花も、既に箸を置いて食器を重ねているところだった。
「お二人は、今日は好きにしててええどすえ。行きたいところがあれば、行ってきてもかまへんよ」
　フルーツを一つつまんで立ち上がり、霧花も天海のもとへ向かっていった。残された照と凪沙は、貴重な大地の恵みを噛み締めつつ、それぞれ物思いに耽っていた。こっそり耳を澄ませてみる凪沙だったが、二人ともそれほど声を張り上げるほうではないせいか、聞き取れるほど鮮明な声は聞こえなかった。その代わりとでも言うように、名前も分からない小鳥の囀りが長閑な村に響いていた。
　照の食事は、食べやすいよう霧花がおむすびの形に整えていた。そのため、食卓には凪沙の使う箸の、普段ならなんということはない音だけが鮮明に聞こえていた。それが気まずかったわけでもないのだろうが、凪沙は口を開きかけては閉じて、を不自然に何度も繰り返していた。
　そして、照がごちそうさまを言いかけたとき、凪沙は意を決したように彼女を呼び止めた。
「……あ、あのさ、照」
　照が顔を上げても、なかなかその次の言葉は出てこなかった。凪沙は必死に言葉を選んでいるかのように頭を抱えて、躊躇いがちに問いかける。
「……照はさ、巫女の力を使うと、身体に負荷がかかるんでしょ？　それなのに、どうして……ここにいようって思うの？」
「ここに、いよう……？」
　凪沙の質問の意図を測りかねるように、照は首を傾げる。
「ううん、言い方が悪かったわね……あたしは変な気が遣えないから、ぶっちゃけた話、聞くけど。照は、望んで調停士をやってるの？　それとも、使命だかなんだかのためなの？」
「……望んで、か」
　照はすぐには答えられないようで、少しの間唸ってから、自信なさげに眉尻を下げて笑った。
「半々、ってところかな。ほとんど物心ついたときからここにいたし、私にしかできないことなんだって聞いてたから、あんまり辞めたいって選択肢自体が無かったのかも」
　それを聞いた凪沙は、やはり自身と彼女とでは前提になる条件が違うのだ、と心の底で少しだけ落胆する。「天ノ巫女」――詳しいことは分からないにせよ、彼女の存在自体が調停士任務における切り札であることは間違いない。最初から選ばれた人間だった照と、ただの平民で

ある自分とでは、見えている景色が違うのだ――そう突きつけられたようにすら感じた。
「でも、辛いなって思うことが無いわけじゃないです。苦しいのは、やっぱり嫌ですし……けど、それはお兄ちゃんも、凪沙さんも、同じでしょう？」
「……あたしも？」
間の抜けた顔で自分を指差す凪沙に、照は笑って頷いた。
「だって、調停士なんて私よりもっと大変じゃないですか。恐ろしい天魔に面と向かって対峙しなくちゃいけなくて……常に怪我や死と隣り合わせで。それでも、そんな辛い思いをしてでも、守りたいものがある。違いますか？」
「……守りたいもの、か」
決して凪沙にそれが無いわけではない。だが――。凪沙は何度も目を瞑っては開いて逡巡していたが、もうどうにでもなれ、と思い切り、迷いを断ち切るようにかぶりを振った。
「……照。今から言うこと、笑わないで聞いてよね」
「ぜ、善処します」
凪沙は大きく深呼吸して、心臓の鼓動を落ち着かせてから話しだした。
「あたしね、『可愛い』を守りたくて、入隊を志願したの」
「……可愛い、を……ですか？」
何かの比喩表現かと思考を巡らせる照だったが、補足するように凪沙は続けた。
「あたしの親、シングルマザーなんだけど、服のデザイナーやってて。ママの服、すっごく可愛くて、大好きだったの。でも、うちの近くで天災が発生して……そのとき、うっかりしてママの服をベランダに干したままにしてて。ママも丁度仕事でいなかったから、帰ってきたら服の生地、どろどろに融けちゃってて」
可笑しいことのように笑いを含ませて話す凪沙だが、その声色には決して中和しきれない悲しみも含まれていた。
「ママは、あんたが無事なら服なんてどうだっていい、また作ればいいんだって、笑って許してくれたけど。そのとき、どろどろの服たちを見て、思ったの。もしこのまま、しょっちゅうあの雨が降るようになったら……もう、ママの服を外で着ることも、できなくなっちゃうのかな……って。ううん、ママの服だけじゃない。憧れのブランドのバッグも、パステルなスニーカーも、色とりどりのリボンも……私の大好きな『可愛い』が、全部無機質で無骨な雨具に、置き換えられちゃう気がして――それだけは、絶対に嫌だって思ったの」
凪沙は他の調停士と比べ、常に「可愛らしい」装いをしていた。レインコートの下に着ている桃色のパーカー

にはリボンやフリルがあしらわれており、ショートパンツにショートブーツと、あまり露出しないのが一般的な調停士にしては、いささか不安になるほどの軽装だった。だが、彼女にとってそれは単なる「お洒落」の域に留まらない、譲れない拘りだったのだろう。

「……これが、あたしが調停士になった理由。誰かのためとか、敵討ちとか……そういうんじゃ全然なくて。だから正直、こんな理由でここにいて良いのかなって、最近ずっと思ってて――」

「……すごいと思います」

思わず感情が昂り、涙を浮かべながらまくし立てた凪沙は、照の発した言葉に「……え？」と耳を疑う。

「だって、凪沙さんは……自分の好きな『可愛い』だけじゃなくて、『可愛い』の未来までも背負って、戦おうと決めたわけじゃないですか。それって、並大抵の覚悟じゃ、できないことだと思います」

「可愛い服が好き」というだけなら、わざわざ調停士など選ばなくとも、それこそ母の後を継いでデザイナーになる選択肢もあったはずだ。だが、彼女は作る側ではなく、それらを守るため戦うことを選択した。自分ではない誰かの作る『可愛い』と、その未来を守るために。

「……ほん、と？」

そこまで肯定してもらえると思っていなかったためか、凪沙はタガが外れたように、涙を溢れさせる。

「ま、前に伊勢島さんが、こういうところに来るのはワケありばかりだから、って言ってて……でも、あたしは、誰が死んだとか守るとか、そういうのじゃ、ないから……場違い、なんじゃないかって、思ってててっ」

顔をぐしゃぐしゃに濡らしながら、声をしゃくり上げる凪沙。照は探るようにして凪沙の手を見つけると、優しく包み込むように握る。

「それが何であろうと、守りたいものを守りたいと思う気持ちに、場違いも何もないです。私は、凪沙さんの想い、とても素敵だと思いました」

「……照」

ぐす、と鼻をすすって、凪沙は照のほうを見る。照もそんな凪沙に向かって、優しく目を細めた。

「……ありがと。おかげで、ちょっと整理ついた」

照は袖で涙を拭うと、ぱしっ、と自分の頬を叩き、顔つきを変えてゆっくり立ち上がった。

「あたし、行かなくちゃいけないところがあるの。夜までに戻ってこなかったら、先輩たちにはそう伝えておいてくれる？」

「分かりました。気をつけてくださいね」

「ん、ありがと」

行きたい場所と言っても、さして気をつけるような所ではなかったのだが、照の優しさが嬉しかった凪沙は穏やかな声でこくりと頷いた。

凪沙は居間を後にすると、戸を二枚挟んだ先の大部屋へ足を踏み入れんと、はやる気持ちを抑えつつ扉を叩いた。
「入るが良い」
低く落ち着いた、威圧的な声がすぐに返ってくる。凪沙は気圧されそうな心を鎮め、覚悟を決めて戸を引く。
「――失礼します」
その部屋は、霧花の部屋や居間とは似ても似つかぬ、一変した様相を呈していた。木の板や布が壁一面にかけられ、何に使うのかもわからない木造の工具が作業台の上に転がっている。一歩踏み出せば、漆やニスの匂いがつんと鼻を突いた。
「何だ、霧花では無かったか」
そして部屋の奥で、何やら設計図らしき紙を広げていた老人が、振り返りもせずそう言った。
京極霧矢（きょうごくきりや）。京極家の当主、霧花の父親にして、由緒正しき傘職人の家系を継ぐ者である。
「昨日はご挨拶できず、すみませんでした。日暮凪沙、東京支部の調停士兼、整備士（メカニック）をしてます」
凪沙が名乗ると、霧矢はようやく顔を上げて振り向いた。昨日のときは少し距離のあるところから眺めていただけだったが、こうして間近で向き直ると、皺の一つ一つが歴戦の勇士のような威厳を刻んでいるようにすら見える。
「あの時の整備士か。何用で此処へ来た」
明らかに、凪沙のことを歓迎はしていないような口ぶりだった。足が竦みそうになる凪沙だったが、ここで引いたら確実に後悔する、という強い直感があった。
「霧矢さんに、お願いがあって来ました」
老人の目つきが僅かに鋭くなる。声に滲む震えを必死に押さえつけて、凪沙は霧矢の眼光の奥に訴える。
「私に、傘の作り方を教えてもらえませんか」

〈つづく〉